

プログラム・ノート

沼野雄司

モーツアルト：弦楽四重奏曲第17番 変ロ長調 K. 458 「狩」

6曲セットのひとつとして1784年に作曲され、ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)に献呈された。ニックネームは第1楽章の主題が狩の角笛を思わせるところから。当時、家庭で演奏可能な弦楽四重奏曲は大きな人気をよび、多くの楽譜が出版されるようになっていたが、沃尔夫ガング・アマデウス・モーツアルト(1756～91)はそうした状況の中で、大衆の嗜好と複雑な技巧を両立させるという離れ業を見事に演じたのだった。全体を通して軽やかな愉悦に満ちているという点では、彼の全作品の中でも一、二をあらそく存在だが、他方、複雑な翳りをたたえた第3楽章アダージョの深みは、むしろロマン派音楽の先駆をなすともいえよう。

ヴィトマン：弦楽四重奏曲第3番「狩の四重奏曲」

今や世界中でひっぱりだこの作曲家イエルク・ヴィトマン(1973～)。その作品の人気の秘密は、最先端の作曲技術を駆使しながらも、根本にどこかポップな感覚が潜んでいる点にあろう。簡単にいえば、音楽が徹底して「明るい」のだ。2003年に作曲された「狩の四重奏曲」も、演劇的な趣向を交えた、実にユニークな作品。

冒頭、まずは掛け声とともに、狩のリズムが響きはじめる(シューマンも『蝶々』作品2でこのモティーフを使用している)。しかし、徐々に混濁した和音が混じりはじめ、暗く深刻な空気が支配的に。さらに終盤に入ると、ハンターだったはずのチェリストは、いつしか追われる立場になっている(!)。「アイ、アイ、アイ」という叫び声を経た最後の場面がどうなるかは、舞台を見てのお楽しみとしたい。

ブラームス：弦楽四重奏曲第3番 変ロ長調 作品67

ヨハネス・ブラームス(1833～97)は夏になるとウィーンを離れ、避暑地でゆったりと作曲に専念するのが常だった。そのせいか、ブラームスが夏に書いた作品には陽気で牧歌的なものが多い気がする。1875年に作曲された弦楽四重奏曲第3番もそのひとつ。

どこかユーモラスな第1楽章は、本日冒頭に演奏されたモーツアルトの「狩」との類似が指摘されることも多い。第2楽章は歌曲のような旋律を持ったアンダンテ。ニ短調の第3楽章は、ヴィオラを主役にした個性的な楽章。のちの弦楽五重奏曲につながる響きだ。そして第4楽章は手の込んだ変奏曲。民謡風の主題を変奏するだけではなく、冒頭楽章の回想を含むことによって、古典的な変奏原理とロマン派の循環形式の橋渡しが行われている。

(ぬまの ゆうじ・音楽学)